

南の国の「ナデシコ」税理士

成功へのキセキ



第7回 稼ぐオンナと夫、そしてリコンの危機

「私にも、やれそうな気がしてきました。おかげで自信がもてました」

札幌の男女共同参画センター様が主催する創業セミナーで、事業計画のたて方についてお話をさせていただいた時の感想です。3歳のお子さんを託児所に預けて参加されたママ、預かってくれる人が見つからなかったので「すみません」と、0歳の赤ちゃんを抱っこして参加されたママもいました。

それは、まさに昔の私の姿でした。預け先が見つからず、消費税のセミナーに、1歳の子どもを連れて出席したことがあります。ベビーカーを座席の横に置き、子どもが愚図ったら、急いで部屋の外にでます。ドアを少しだけ開けて、廊下から講師の話の聞き漏らすまいと一生懸命に聞き耳をたてたのも、なつかしい思い出です。

その後しばらくして、税理士会の役員をやるようになったとき、先輩の先生から、「あの時子ども連れで来ていたのはキミか」と言われたので、余程印象に残っていたのでしょう。というより、男性の先生からしたら、まったく迷惑な話だったのかもしれない。

当時は、女性が働くということに対して、世間は今より寛容ではありませんでした。子どもが5～6歳のころだったでしょうか。確定申告の期間中、税務署が土日でも開庁するというので、税理士会でも土日に無料相談会を開くことになりました。夫はサラリーマンなので、土曜日と日曜日は完全にお休みです。弊事務所で働くスタッフたちもそうですが、パパが子どもの面倒をみてくれるので、働くママは週末こそ、安心して思う存分働ける、というわけです。

その日は、確か日曜日でした。子どもを夫に預け、私は確定申告無料相談会の相談員として参加しました。相談会が終わったあとは、先生方同士で食事でもしようかという流れに。普段ならベビーシッターさんが帰る6時までには帰宅しなければなりません、その日は夫がいるので、安心して飲み会に同行しました。そのとき、年配の先生から、不思議そうに質問されたのです。

「今日、お子さんは、どうしているの？」

「パパがお休みなので、大丈夫です(^^)」

「ふーん、日曜日に子どもの面倒を見なくちゃいけないなんて、ご主人、かわいそうだねー」

エッ、エッ、エッ、かわいそう…???

だ、誰が…?

可哀想なのは、せっかくの日曜日に子どもと過ごすこともできず、働いている私の方じゃないの？大企業に勤める夫は、きっちりお休みをとって、子どもと楽しい時間を過ごしているのに…。

たぶん戦前生まれの男性からしたら、平日にたっぷり働き、さらにお休みの日にまで子どもの相手をさせられているのは、可哀想だという発想だったのでしょうか。小さな子どもがいるのに、休みの日にまでバリバリ働く私は、一世代前の男性から見たら、不思議な存在だったようです。

女性が働きつづけるためには、家族の、そしてやっぱり夫の理解が必要です。病気がちだったり、非行に走ったり、家庭内で暴力をふるうような子どもだったら、母親は働けない。妻が家を空けるたびに、不機嫌になるような夫だったら、やっぱり妻は仕事を続けることができません。

会計事務所の仕事には、期限があります。年末調整や確定申告の時期になると、どの税理士も10時11時まで働くのが普通です。繁忙期には私も子どもを寝かしつけてから、着替えて事務所に戻り、残った仕事を片付けていました。夫もできるだけ早く帰宅して、子どもの面倒を見てくれるなど協力してくれました。

それでも、忘年会や新年会シーズンともなると、週末の金曜日は、夫も私も大切な宴会の予定がぶっ壊れてしまいます。そんな時、どちらが早く帰宅するかで、喧嘩になることもしばしばありました。クライアントやスタッフの数が増えて、私もひかなくなることが増えたからです。

これはまさに、リ・コ・ンの危機…。

結婚すると女性は、自分の時間を自分のためだけに使うことが、できません。子どもの行事が優先、夫の都合が優先…。それでも仕事をしていると、社会的な責任も発生するし、夫に対する甘えもできます。いやいや、綺麗事はやめましょう。仕事をして、生活できるだけの収入を稼げるようになると、社会人としての自分に自信ができて、早い話、可愛げがなくなってくるのです。

稼ぐオンナたちが、リコンにいたるパターンというのは、大抵こんな形でやってくるのではないのでしょうか。大切なのは、相手をリスペクトする気持ち。一人の男性として、尊敬する気持ちだと思います。

弊事務所は、スタッフ全員が女性です。彼女たちの生き様は

◆筆者 原 尚美 (はら なおみ) プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練(現:全国公開模試)「財務諸表論」「法人税法」を全国1位の成績で、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性だけのスタッフ30名、一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に「小さな会社のための総務・経理の仕事がわかる本」「小さな起業のファイナンス」(いずれもソーテック社)、『51の質問に答えるだけですぐできる「事業計画書」のつくり方(日本実業出版社)』『トコトわかる株式会社のつくり方(新星出版社)』『世界一ラクにできる確定申告(技術評論社)』『一生食っていくための土業の営業術(中経出版)』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

さまざまです。独身女性。婚約中。パツイチ。シングルマザー。同棲中。別居中…。この原稿を書いている今、産休・育休中のスタッフが4名います。なぜかお目出たは伝染するらしく(笑)、4人同時に産休というのは、事務所を運営していくうえでさすがに大変です(汗)。

とはいえ、予定がたてられる産休は、まだ何とかなります。妊娠が分かってから、産休に入るまで数ヶ月ありますし、病気ではないので、何かあったときいつでも連絡が取れるからです。本当に大変なのは、ご主人の転勤です。早いときは、1週間後には引き継ぐ間もなく、あつという間に妻であるスタッフも退職していきます。

またご実家のご両親が倒れた…というケースも大変です。看病するのは、娘か男兄弟の嫁というパターンがほとんど。ご実家が地方にあり、ご両親と最後の時間を過ごすために退職したスタッフもいました。

良い・悪いの問題ではなく、それが働く女性の現実です。だから女性の事業計画は、男性のようにはいきません。目標をきめて、その通りに実行しようとしても、絶対にそのとおりになどいかないからです。

自分で自分の人生をコントロールできない私たち女性が成功するために必要なのは、「ブレない力」です。ブレないためには、自分のミッションを明確にすることが大切。なぜ働くのか？なぜその仕事でなければいけないのか？を、言葉にしてみてください。自分にとって大切なものは何か？絶対に失いたくないものは何か？を考えてみましょう。

すると、自分にとって大切なものが、見えてきます。大切なものの順番が明らかになったら、その順番を決して崩してはいけません。私たちは、目先の欲にとらわれてつい、ブレてしまいがち。でも、長い目でみたら、結局は仕事も家庭生活も中途半端になってしまいます。

最近、ママ起業家が増えています。そして同時に、ママ起

業家に対する批判もあります。オンナどもは、男性の社会常識をメチャクチャにするというものです。手作りというだけで、質の悪い商品を法外な値段で売る。逆にタダ同然の価格でサービスを提供して、苦勞して築いたオトコたちのマーケットを破壊する…。

確かに私たちオンナは、歴史的に組織で働いた経験値がありません。なので、オトコたちにとっては当たり前、組織の論理が通用しないのは事実です。オトコたちが怒るのは、ある意味、当然ともいえます。

でも、経験値が乏しいというのは、私たちオンナにとって弱みでもあり同時に、強みでもあるのです。過去の経験に囚われない新しい発想でビジネスをつくることのできるからです。

私も、最初は典型的なママ土業でした。会計事務所はこうあるべき、という知識がなかったので、事務所経営のイロハも分からず、社長から頼まれれば採算度外視でサービスを提供してきました。単なる記帳代行ではなく支払などの経理実務や、請求書の発行・売掛金の消し込みなど営業事務の代行をしたり、エクセルを使って、経営会議用の資料を作ったり。さらには社長のスケジュール管理をしたり、芸能人のマネジメントをしたこともありました。

別居している社長夫妻の書類の受け渡しをしたり、プーターの彼氏との結婚相談に乗ったり。またDVで困っている女性社長を見かねて、警察に相談に行ったり。

これらは本来、税理士の仕事ではありません。でも、会計事務所とはこうあるべき、という既成概念がなかったからこそ、社長の困ったを解決するお手伝いをしたい、という気持ちだけで突っ走ることができたのです。

結果として、それが事務所拡大の原動力となりました。

時の政治家に言われるまでもなく、日本を元気にできるのは、既成概念にとらわれない私たちナデシコの無手勝流パワーだと思うのです！

新刊発売中

ダンゼン得する いちばんわかりやすい
創業融資と補助金を引き出す本

原 尚美 著(ソーテック社) 1,480円+税

創業融資と補助金をガッツリ引き出すための本です。ミャンマーに会計サービスの会社をつくって1年。法律も習慣も違う国で、大変なこと、ツライことはたくさんあるけれど、それでもいま心から思います。起業は楽しいこの楽しさを、皆と分かち合いたい。そのためのノウハウを伝えたい。そんな思いから、起業時の資金調達について、書かせていただきました。コネもない、知識もない、資金もない、でもアイデアと情熱だけは、誰にも負けない!という人に読んでいただきたい本です。